

# 古墳時代モガリについての一思考

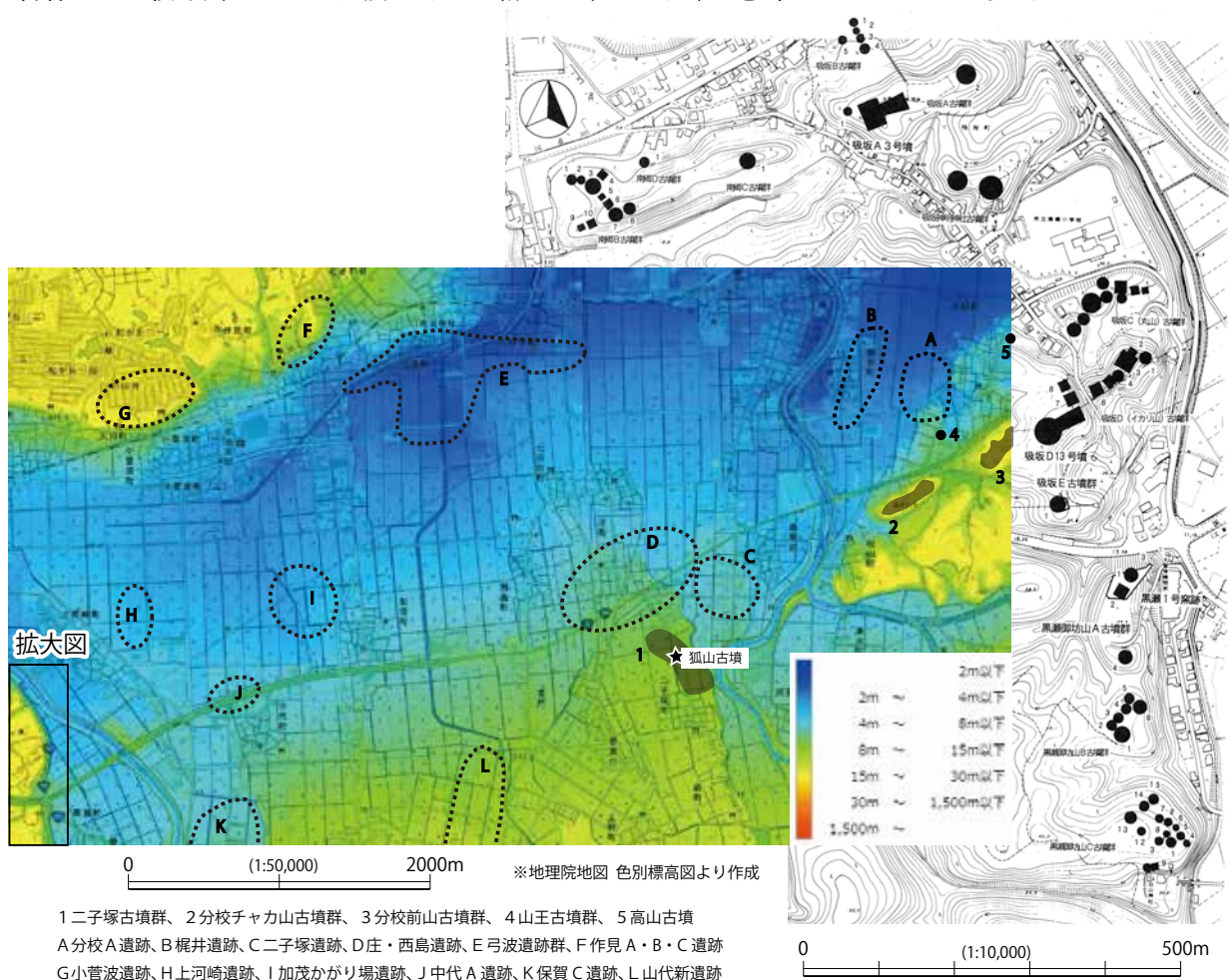
—黒瀬御坊山 A2号墳出土剣の<sup>いようかく</sup>囲蛹殻をめぐって—

伊藤雅文

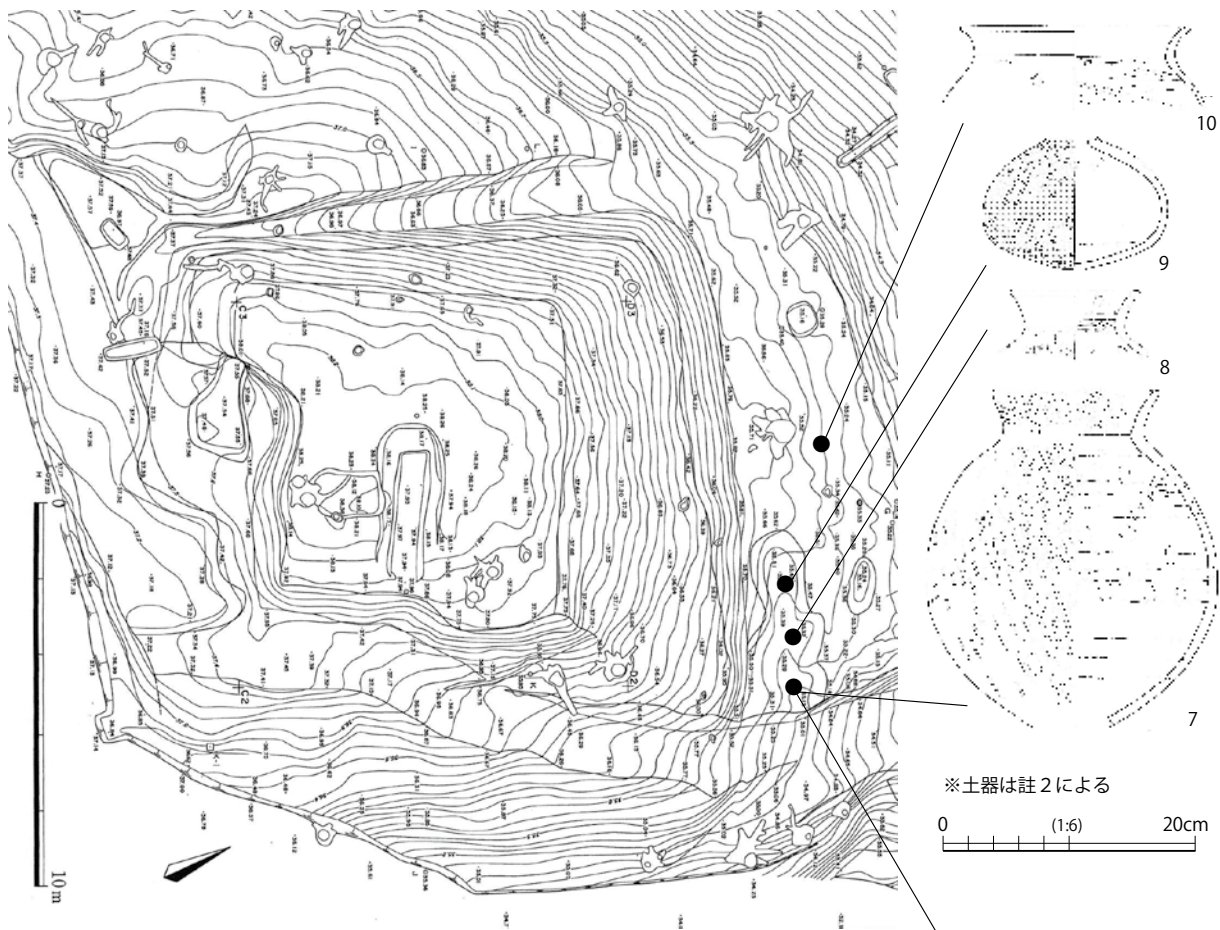
## はじめに

当県は14県で構成される古代歴史文化協議会<sup>(1)</sup>の共同調査研究に参加しており、当財団も調査研究に協力している。第2期共同研究として令和元年度から「古墳時代の刀剣類」をテーマに研究を進め、今年度で区切りとなる予定である。その集成作業の過程で資料の見直しなど行なっていたところ、平成9年(1997)に発掘調査された加賀市黒瀬御坊山A2号墳埋葬施設から出土した剣に双翅目(ハエ目)囲蛹殻(以下ハエ囲蛹殻と略)の付着を確認し、再度実測図を取り直すなどの調査をおこなった。もちろん、発掘調査報告書<sup>(2)</sup>(以下報告書と略)でも観察されており、「布目痕(10条/cm)帯があり、帯中に米粒大の、凹みがある。凹みは何かの虫の卵或いは蛹の圧痕のようにも見えるが、布に刺繍が施されていたのかもしれない。」とその存在に注意を払いつつも断定を避けている。

ハエ囲蛹殻が広く研究者に注意されるようになったのは、おそらく出土人骨とともに多数のハエ囲蛹殻が出土した愛媛県葉佐池古墳の調査<sup>(3)</sup>によるところが大きいと考えられる。黒瀬御坊山A2号墳を調査して遺物整理から報告書作成した当時、ハエ囲蛹殻の知識が私たちに十分でなく、報告書が刊行された後も剣についた圧痕とそれが結びつくことなく、忘却されていたのである。



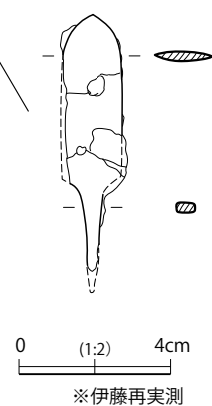
第1図 周辺の遺跡分布図(S=1/50,000)、古墳群分布図(註2より改変)(S=1/10,000)



墳丘と墳丘出土遺物 (S=1/200)



航空写真（北西から）  
左が1号墳で右が2号墳



墳丘全景（西から）



第2図 A2号墳墳丘（註2から引用・改変）



年度当初に行った刀剣類集成表をチェックしたところ、当該資料の集成表備考欄の記載が気になったので、筆者が遺物を確認したところ、報告書で述べられた「虫の卵」や「刺繍」でなくハエ囲蛹殻であると確信した。ハエ囲蛹殻は全国的にも確認例が少ないものの、古墳時代の埋葬過程を直接的に知ることができる可能性を持つ重要な資料である。本稿では、出土した意味を考察したい。

なお、この認識に基づく資料化のために、筆者が実測と写真撮影などを行った。実測にあたっては、X線透過による観察もおこない、剣の関部と茎部および布目圧痕で報告書の認識に問題があると分かったので、剣についても再検討結果を報告するほか、同時に出土した鉄鏃についても誤った認識があったので、再実測して修正を加えた（第2図）。

## 1. 黒瀬御坊山A2号墳について

黒瀬御坊山 A2号墳は、加賀地域の低地部南西端にあたる通称江沼低地に東面する丘陵上に位置する。江沼低地は、南東の山麓から流れ出す大聖寺川と動橋川が形成した沖積地で、現在の柴山潟などの潟湖や北潟河口につづく低地帯となっている。おおむね標高8m 前後の低地部には弓波遺跡や二子塚遺跡など弥生時代から続く集落遺跡が営まれているほか、低地部を望む丘陵上には小菅波墳墓群や分校カン山（前山）1号墳などの弥生墳墓と古墳が多数築かれている。

低地に面する西側の丘陵は100基程度の古墳が密集するエリアであり、そのうちの一基が本墳である。この南北1km強の範囲に南郷古墳群26基（A～D支群）、吸坂古墳群27基（A～F支群）、黒瀬御坊山古墳群23基（A～C支群）などが分布する。群を構成する古墳には、加賀最大の前方後方墳である吸坂 A3号墳（全長61m）や大型前方後円墳である吸坂 D13号墳（全長67m）があり、首長墳も築かれているのが特徴である。調査が一部にしか及んでいないが、断続的ながら古墳時代のほぼ全期間にわたって、時期ごとに異なる場所で古墳を造営し、墓域として機能し続けたようである。吸坂 C支群（吸坂丸山古墳群）の吸坂丸山5号墳では、小札鋳留衝角付冑と肩甲のセットや細身の金製耳飾りが出土するなど、小古墳ながら特徴ある副葬品である。

黒瀬御坊山 A 支群は、1辺20m の1号墳と15m の2号墳の方墳2基からなる支群である<sup>(4)</sup>。1号墳は、木棺直葬により棺内から面径7.2cmの乳文鏡、碧玉勾玉、滑石白玉のほか長頸鏃が出土しているので、2号墳よりも後出する。5世紀後葉築造である。

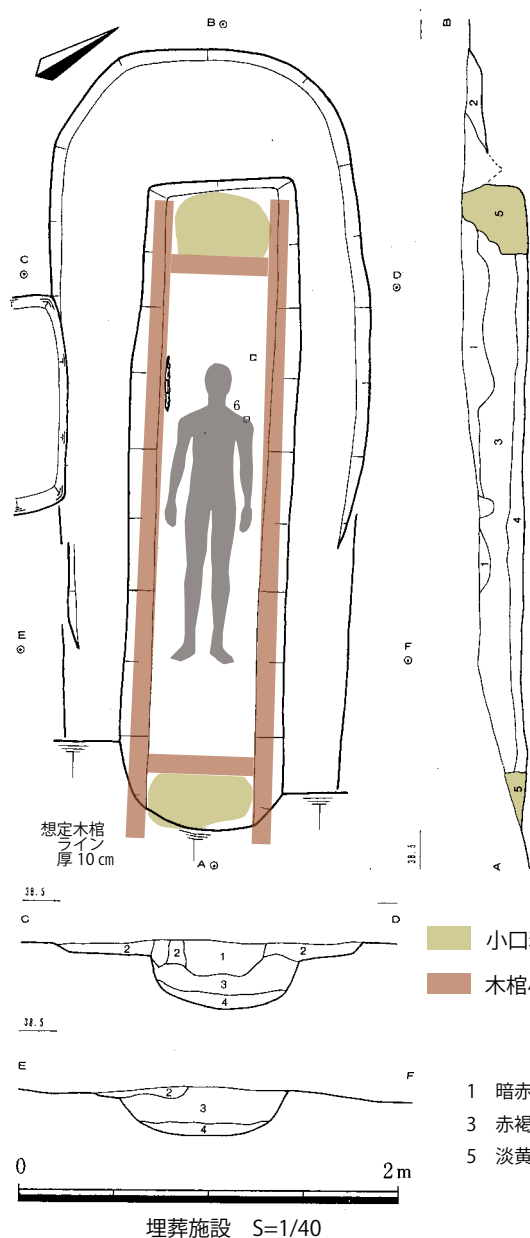
2号墳は丘陵頂部の平坦面からやや下がった位置に墳丘が作られ、「L」字状に周溝を掘削して墳丘を作り、墳頂中央あたりに埋葬施設を1基構築している。土器は主に墳丘北裾あたりに集中して出土しており、7の土器器壺の下から柳葉鉄鏃も出土しており、墳丘外で行なわれた祭祀によるものと考えられる。概ね5世紀初頭頃の築造であろう。

埋葬施設は木棺直葬だが、粘土と赤褐色土を混和した土を小口に用いており（これを小口粘土と称する）、粘土槨を意識した構造である。墓坑東端は削平により失われているものの、木棺部分はほぼ完存している。木棺底が墓坑底をさらに一段「U」字状に掘り込まれ、木棺底部外形を示すものである。埋葬施設主軸土層断面では両小口粘土が木棺内側に面を持つようにあり、これも木棺小口板の状態を示す。しかも木棺内最下部にある黄茶色土（No.4）は8cm程度の厚みで水平に認められ、木棺底板に関わるものであろう。すなわち、両小口粘土の間が木棺の底板であり、底板外に小口板を置くものではなく、底板上に小口板を置く形式である。そして刳貫式木棺の可能性はない。

以上の観察から、底板、2枚の長側板、2枚の小口板そして蓋板から構成される組合式箱形木棺と想定される。このような構造の場合、一般的には、2枚の長側板が底板よりも長く両小口粘土を挟む。本墳では判断するデータはないが、おそらく木棺掘り込み一杯に長側板が及んでいるだろう。したがっ

て木棺は内寸長約2.7m、同幅約0.5m で、木棺底は水平である。

一般的に被葬者の頭の方が棺底レベルを高くしたり、あるいは木棺幅が広くなるという傾向にあるものの、本墳ではそれを判断できるデータはない。想定される西小口板から約40cm離れて出土した鉄剣は、剣先を反対の東小口に向けており、これを手がかりとすれば、西に頭を向けて埋葬されていたと想定できる。そして被葬者が木棺の中央に埋置されたとすれば、頭部右側付近に剣が置かれていた状況を復原できる。50cmから55cm程度の箱形木棺の外寸幅の事例が多いので、本墳の場合はそれらよりやや幅広い木棺となろう。すなわち、遺骸は木棺の内部でゆったりと置かれていると考えられる。それゆえ、長側板に接すると想定した剣と遺骸との間には若干の空隙が存在していると考えられ、被葬者に密着した状態ではない。



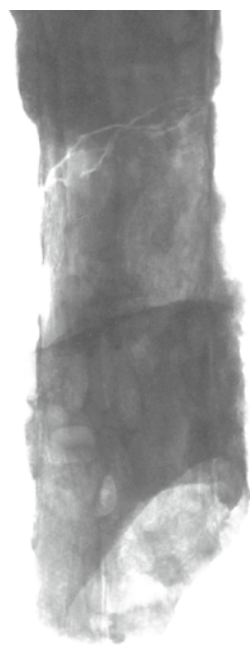
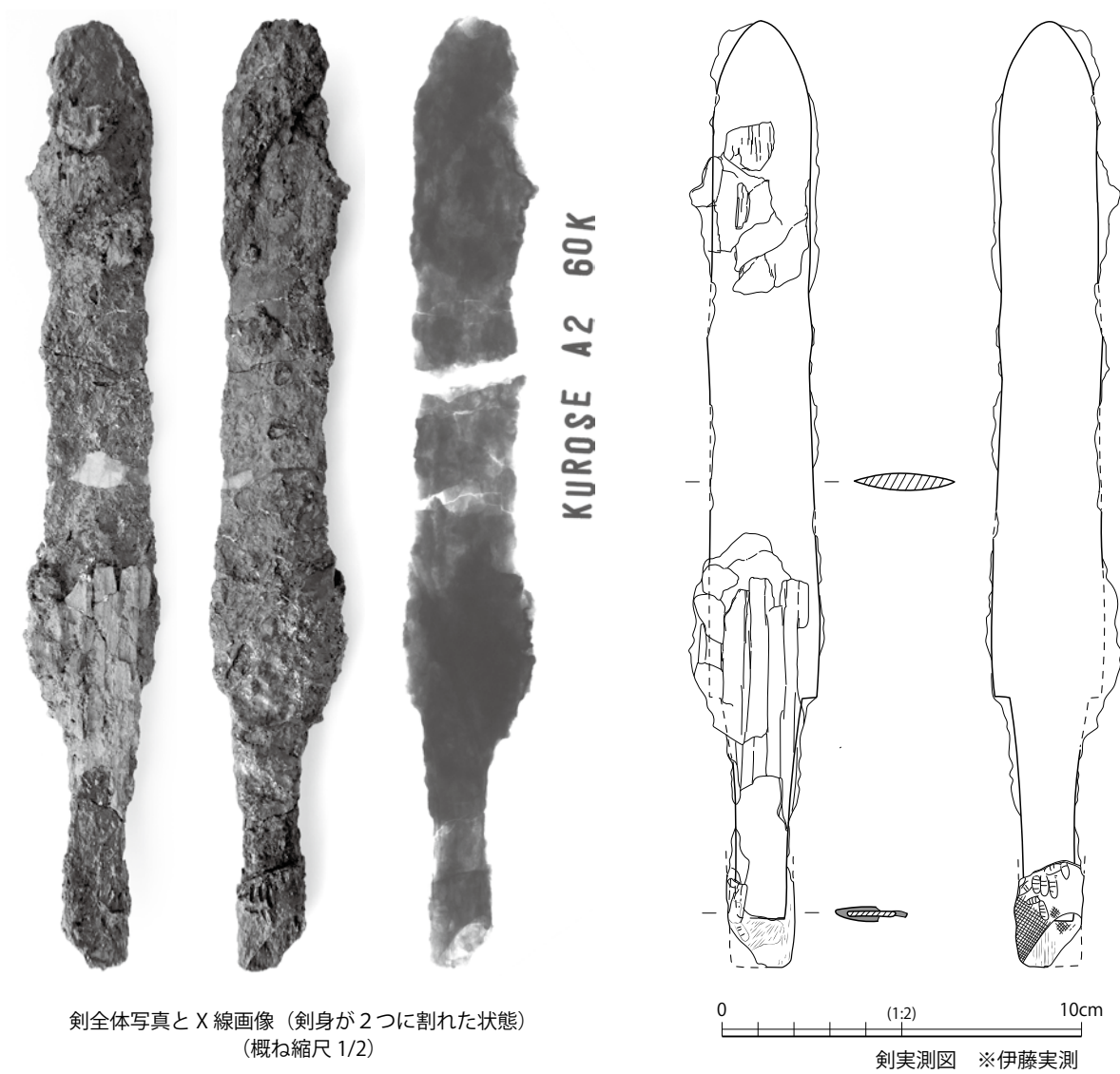
埋葬施設全景（南東から）



鉄剣出土状況（北東から）

第3図 A2号墳墳丘（註2から引用・改変）





X線画像



表



裏

拡大写真

第4図 黒瀬御坊山 A2 号墳出土剣

## 2. 出土鉄剣の観察

報告書における剣本体の所見については、全長26.5cm、身部幅3.7cm、茎部長5.7cmとあり、関部は特に記述なく、茎部は栗尻で布帯付着、片面付着の木質は木棺材、という内容であった。これを以下のように訂正する。

剣は、全長25.0cm、身部長18.8cm、身部幅2.8cm、茎部長6.2cmをはかり、小さな直角関である。身部の幅は剣先から関部にかけてあまり変わらず、若干太くなるようである。剣身には鎬がなく、レンズ状の横断面形で5mm程度の厚みである。関は4mmの長さで直角に屈曲し茎部に続く。茎部は関から漸次幅を減じて茎尻となっており、目釘孔が認められない。鍔から茎部の幅を知る部分は少ないが、その端部（茎尻）では厚さ2mmと薄いので、おそらく茎先端にかけて厚みが薄くなるのであろう。

剣の一方面には木質が遺存している。木目は幅広で粗く、スギのような針葉樹と思われる。木質は身部から茎部にかけて切れ目なく連続しているので、鞘や把の部材の可能性は考えられない。木質が残された側が下面に接していることから、この木質が出土木棺材と判断できる。以上より、この剣は、鞘や把が装着されていない状態で副葬されていたのである。

次に茎部の一部を覆っている布及びそこに付着したハエ壱蛹殻について観察する。

便宜的に木棺に接しない方を表として記述を進める。茎部端部には布が残っている。布は両側縁が当初の形状を保っており、筒状を呈するようだが、縫い目はわからない。表面では右隅にかけて斜め方向に鋭利なもので切られたような直線的に失われている部分がある。布の内側には有機質のようなものが認められ、材質はわからないが何かに布を貼りつけていたと考えられる。木棺に接する側には布の痕跡が認められないが、表と同じように有機物のようなものが観察されるので、表面における布がはがれた状態と判断できよう。布の下端は直線的になって左側縁から布目が連続するので、布が折られた状態で、いわば袋のような構造ではないかと考えられる。布の上端は直線ではないが切り取られたように直線的な縁となっている。そこを仔細に観察すると、わずかに端部が反り返っており、切り取りによりめくり上がったものと考えられる。このように考えると、布が剣先方向にさらに伸びており、剣身に布が残っていないので、副葬時における布の範囲は茎部端のみであった。布部分を仔細に観察すると、付着したハエ壱蛹殻から右側部分において布目の確認が困難で、部分的に漆のような滑らかな面となっている。表現は適切でないかもしれないが、布目がコーティングされているように見える。作為的かどうかかわからないが、特記すべき観察として報告する。

剣の茎端部は布の下端から1.3cm離れており、布を袋としてその末端まで剣が入っておらず、軽く差し込んだような状態である。

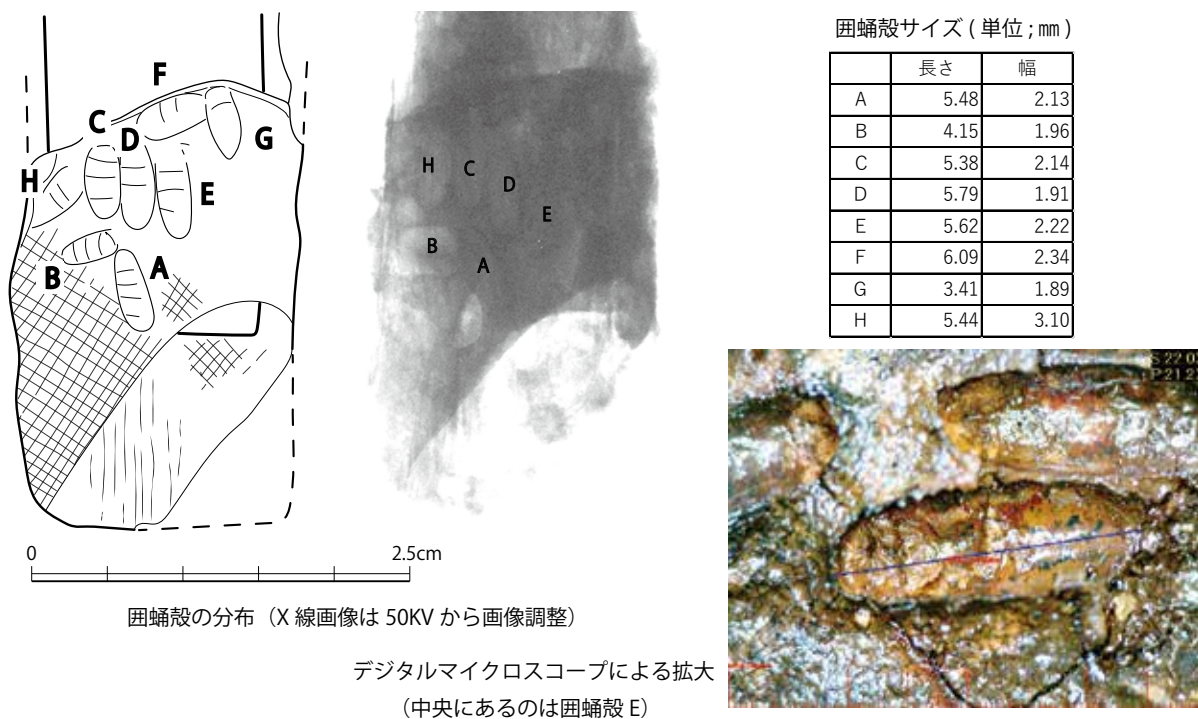
ハエ壱蛹殻と判断した圧痕はこの布の上にあり、そこ以外では確認できない。その圧痕は9箇所あり、一見すると長楕円形を呈するが、一方端が直線的になっているところもある。凹み内部には長軸に直交する筋が認められる。このような特徴から、昆虫の蛹等の可能性が高いと考え、類例からハエ壱蛹殻と判断した。検出されたその痕跡は、その上半分が欠損した状態である。平面的にほぼ完全な輪郭を残すのはA・C・E・Dがある。その大きさは、ハエ壱蛹殻には欠損部分があるが、デジタルノギスによる計測に誤差もあるため、最大と最小値を外して求めた長さの平均は5.31mm、最大幅2.24mmである。この大きさは、ニクバエ科の壱蛹殻に該当しようが、条線を観察できるところからするとヒメクロバエ科の壱蛹殻の可能性もある<sup>(5)</sup>。

ハエ壱蛹殻は相接しており、かなり密な状態である。これらが並ぶ方向は大きく二つに分かれ、剣の軸と同じものと、それに直交するものである。壱蛹殻AとC・D・EおよびGが軸の方向で相接して並び、その間に壱蛹殻BとF・Hが隙間を埋めるように並ぶ。わずかな時間差で蛹になるため



に隙間を埋めるように移動したものであろう。ハエの幼虫（ウジ）が蛹になるときは摂食場所から移動するため、遺体近く剣がおかれていたことが推測される。また、最も下端にあたる A や B の囲蛹殻は若干離れているので、より上部に蛹が密集した部分が存在したものと考えられる。布の上端が本来の形状を保っていないにもかかわらずちょうどそこでハエ囲蛹殻が収まっているのは、別部品の布等の存在を示唆するものかもしれない。

したがって、付着したこれらは被葬者の遺体から発生したウジによるものであり、その蛹化にあたって近くに置いてあった剣をくるんだ布などの外装にとりついたものである。実際の埋葬時には、剣身の大部分をおおっていたと思われるこの外装が取り外されたものと推定したい。



第5図 剣表面に付着したハエ囲蛹殻

### 3. 囲蛹殻の類例

本資料は石川県におけるハエ囲蛹殻の初めての確認例となる。坂本豊治氏によるとハエ囲蛹殻を確認できた古墳は全国で50例という<sup>(6)</sup>。筆者はこれらのすべての事例を把握していないが、ハエ囲蛹殻付着のプロセスを考えるために参考となる類例を確認する。

A 葉佐池古墳（愛媛県松山市北梅本町）<sup>(7)</sup>

松山平野最奥（最東）に位置する全長56mの前方後円墳で、6世紀後葉（須恵器のTK43型式期）に作られ、5基の横穴式石室が順次構築されている。発掘調査は1993年から行なわれ、同年実施された1号石室調査で未盗掘状態であることがわかり、人骨Bでハエ囲蛹殻が確認され、その存在が注意されるようになった。1号石室における埋葬の経過は、次のとおりである。

- ① TK43型式期に石室中央にある木棺 A に人骨 C を納める
- ② TK209型式期に木棺 A から人骨 C を出して側壁との間に移し、木棺 A に人骨 A を納める
- ③ 木棺 B に人骨 B をのせた状態で木棺 A 右側に配置する

最終埋葬者である人骨 B の主に頭部から胸部にかかる範囲にハエ囲蛹殻が多量に付着していたのである。報告書の図版では、頭蓋骨・眼窩上部・下顎骨・左上腕骨・寛骨に付着したハエ囲蛹殻が掲載

されている。

木棺 B ごと取り上げて人骨調査が行われ、その過程でハエ冢蛹殻の存在が確認されたためその付着状況の具体的な記述はないが、土中に埋まっていなかったことで生々しいハエ冢蛹殻が完全な形で保存されており、累々と重なっている状況がみられる。木棺 B は側面の部材がなく底板のみの形態である。木棺内には、左腰あたりに刀子が唯一副葬されており、これには冢蛹殻が付着していないようである。また、木棺小口外には4本の鉄鏃と鑿がおかれているが、これらにも冢蛹殻は残っていないようだ。これはすなわち、ハエの蛹化にあたって、これらの副葬遺物が遺体の近くになかったか、あるいはそれらをきれいにした状態で副葬したものと思われる。

#### B 姥ヶ入南遺跡（新潟県長岡市大字島崎）<sup>(8)</sup>

新潟県中越地方に位置し、東頸城丘陵が分岐する沖積平野に接する丘陵端部にあたる。近隣には古代城柵である沼垂城と記された木簡が出土し古代官衙と想定されている八幡林遺跡が南西1km弱に所在する。報告書では出土土器から弥生時代後期後半の墳墓としているが、墳丘平面形を見れば古墳時代前期に作られた方墳の可能性もある。墳丘中央で検出された土坑は埋葬施設と考えられ、棺の輪郭等は不明である。土坑内部から袋状鉄斧と剣が直交する状態で出土した。剣は被葬者の体側に置かれることが多いことから、剣の置かれた方向が木棺の長軸を示すと考えられる。そして鉄斧は木棺軸に対して直交した状態で置かれたのである。これらの遺物が墓坑端から約40cmしか離れていないので、木棺小口に置かれたことがわかる。すなわち、斧は被葬者頭上、剣は頭右側に置かれていたものと推測したい。剣は抜き身で副葬され、斧も布等に包まれた痕跡はない。

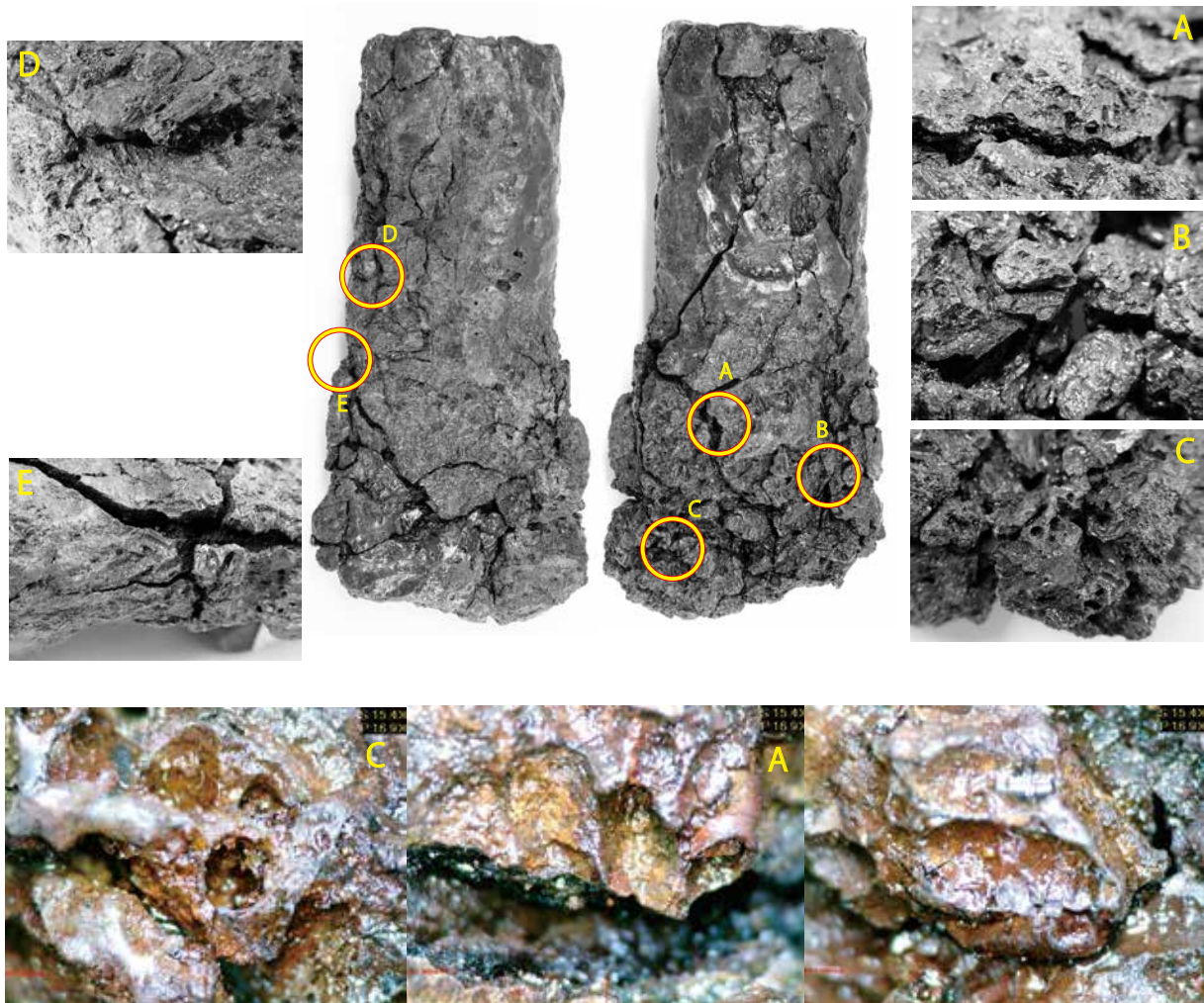
ハエ冢蛹殻は斧にのみ確認できるが、袋部内部には付着していない。斧は保存処理が施されており、報告書の実測図によるハエ冢蛹殻付着のイメージと少し違和感がある。とくに袋部の合わせから刃部にかけて表面に描かれたハエ冢蛹殻は認められない。刃部を中心にハエ冢蛹殻が遺存している。それらは鉄の地金に直接付着している状態で、砂を取り込んだ錆には認められない。写真 A や写真 E では金属面に直接付着している状態で、写真 A に写ったハエ冢蛹殻1個体の胴部の前か後の半分が欠けているものの輪切り状態である。写真 C のように丸い穴状となった部分も多く確認でき、普通の錆にはない特徴なので、ハエ冢蛹殻の胴部断面が見えているのであろう。さらに、錆とも異なるサクサクしたように見える部分が塊を構成しており、その中にハエ冢蛹殻断片や丸い穴となって見える冢蛹殻胴部が多数認められる。これは刃部を中心に広がり、報告書の実測図では錆膨れのような表現となっているが、この部分はよく見られる錆の状態とも異なる。ハエ冢蛹殻が幾重にも重なった状態が見て取れる部分があるので、この一見錆のように見える部分は、塊となったハエの蛹が鉄の錆化の中に取り込まれたものではないかと考えられる。

また、袋部の合わせ目には木棺の木質が付着している。袋部の地金と木質は密着しているが、刃部にかかる部分の木質には若干の隙間がある。その部分をよく観察すると、冢蛹殻のような輪郭の跡が認められる（写真 D）。木棺内でウジが蛹化する時に木棺と斧の隙間に入り込んだのか、それとも蛹化した状態で付着した斧を木棺に置くことによって下敷きになったものなのか、2つの可能性が考えられる。

姥ヶ入南遺跡のハエ冢蛹殻は、内部に節としての条線が認められ、黒瀬御坊山 A2号墳と同じ特徴である。しかし、黒瀬御坊山 A2号墳の冢蛹殻と比較してやや小さなサイズのイメージを受ける。黒瀬御坊山 A2号墳と同じ方法によって大きさを平均すれば長さ5.12mm、幅1.99mmとなる。やはり僅かながら小さい。国立感染症研究所昆虫医科学部 林利彦氏によりイエバエ科に同定されている。



報告書では、このハエ囲蛹殻付着理由についてモガリの可能性を提示しつつ、別な理由として、墳墓への埋葬後に墳丘封土流失により木棺が露呈し、露出した遺体に発生したハエに由来する可能性も指摘している。先の観察では、ハエ囲蛹殻とともに砂粒などの埋土に由来する鏽に取り込まれた付着物が確認できないので、後者の可能性は低く、埋葬完了前にハエ囲蛹殻が付着したと考える。



デジタルマイクロスコープによる拡大

第6図 姥ヶ入南遺跡出土鉄斧付着ハエ囲蛹殻（写真はすべて伊藤撮影）

#### D 那珂遺跡（福岡県福岡市中央区天神）<sup>(9)</sup>

福岡県福岡市中心部に位置する那珂遺跡の129次調査で検出された土坑墓（SK215）から出土した鉄器に囲蛹殻が確認された。SK215（長さ247cm、幅55cm）は深さわずか15cmであったが、小さな剣状の鉄器1点のみ出土した。また、類似する土坑墓（SK024）から須恵器が出土していることからSK215を6世紀後半と報告するが確証はない。そしてこの土坑の大きさでは、一般的な木棺幅とほぼ同じなので、木棺土坑墓の可能性もある。ハエ囲蛹殻は剣状鉄製品の一方面にのみ付着しており、もう一方が床などに接して空間がなかったためであろう。このハエ囲蛹殻は埋葬された人から発生したものに違いない。被葬者と鉄器の土坑内での位置関係は示されないので想像するしかないが、蛹化にあたって近くに置かれた鉄器に辿りついたのであろう。報告では、SK215に遺骸を置いた状態で木蓋等するなどし、埋めずに墓を開放した状態によるモガリを想定しているものの、出土状況のデータが示されていないので、当否の判断はできないが、それを否定する材料はない。

#### E 結11号墳(島根県出雲市)<sup>(10)</sup>

結11号墳は出雲平野の南に位置し、近隣には荒神谷遺跡が所在する。墳丘は11×14mの方墳で、底面および側面が人頭大の礫からなる礫層を埋葬施設としている。おそらく木蓋により埋められていたのであろう。頭部にあたる側に、蛇行剣1振、刀子3本、鉄鏃9本が副葬品として出土した<sup>(11)</sup>。ハエ冢蛹殻は剣把を中心に付着している。身部には木質が遺存しているので、装具に入った状態での副葬である。ハエ冢蛹殻は把口よりも把尻の方に密に並んでおり、検出状況に粗密がある。筆者が蛇行剣研究のために平成27年に資料調査を行ったときは、その存在に気づきながら、知識が十分でなかったためしっかり



第7図 結11号墳冢蛹殻(出雲弥生の森博物館提供)

観察できなかったのは残念だ。当時の実測図および写真を見返すと、長さ5～6mm、幅2mm前後の長楕円形の圧痕が所せましと並んでおり、これが把口に行くにしたがってまばらとなるようである。そして、ハエ冢蛹殻が幾重にも重なったような状況ではなく、平板な印象である。頭部周辺が最もハエ幼虫であるウジが発生するようであり、遺体の近くに剣があったのであろう。

#### F 島内地下式横穴墓群(宮崎県えびの市島内)<sup>(12)</sup>

宮崎県内陸部に位置する。地下式横穴墓群は現在の宮崎県から鹿児島県大隅半島北部や川内川流域にかけて分布しており、特徴ある墓制として注目される。地下式横穴墓は、完全に密閉されている関係で有機物の保存が極めて良好であり、具体的な埋葬に関係する多くの情報が提供されている。本稿ではハエ冢蛹殻に限って検討したい。島内地下式横穴墓は現在200基近くが確認されているようだが、今回検討するのはそのうちの6基で、出土傾向を確認したい。なお、平成10・11年の調査ではそれに注意が払われることはなく、図化されていなかったが、資料の再検討により冢蛹殻の付着を確認できたものである<sup>(13)</sup>。

ST20では5体の人骨が確認され、4・5号人骨への副葬品にハエ冢蛹殻が付着していた。4号人骨頭部左側には鉄鏃1本とその骨鏃19本が一塊になっていたが、ハエ冢蛹殻は鉄鏃のみから検出された。5号人骨では頭部右側に長剣1本とその把あたりに刀子1本、剣鞘から少し離れて鉄鏃11本が出土しているが、ハエ冢蛹殻は剣や刀子ではなく一番離れた鉄鏃に付着していた。ST29では4体の人骨が確認され、1号人骨足元出土の刀子にハエ冢蛹殻が付着していた。追葬の3号人骨が1号人骨大腿骨に頭を載せているので、3号人骨に伴うハエ冢蛹殻の可能性もある。4号人骨は幼児で頭骨からやや離れて6本の鉄鏃にハエ冢蛹殻がある。これらの冢蛹殻が埋葬遺体由来である。ST31では7体の人骨が出土した。2号人骨頭部右に鉄鏃8本と小刀1本が出土し、そのうち鉄鏃2本にのみハエ冢蛹殻が付着していた。鉄鏃は一塊となっており、錯落とし等により脱落した可能性は否定できないが、鏃に取り込まれたハエ冢蛹殻は容易に判別できるのでその可能性は低い。ST34では2体の人骨が出土し、1・2号人骨の間にある鉄鏃5本にハエ冢蛹殻が付着していた。1号人骨近くの刀子にはハエ冢蛹殻はなく、より遠い5本の鉄鏃に付着している。2号人骨と鉄鏃5本は60cm程度の間があり、少し離れた刀



子にはハエ囀蛹殻が付着していない。ST46では3体の人骨が出土し、1号人骨左腰付近に小刀1、鉄鏃4本が出土し、ハエ囀蛹殻が付着しているのは鉄鏃のみである。ST60では2体の人骨が出土した。2体は成人女性と幼児なので親子であろうか、相接している。人骨から70cmほど離れて出土した刀子にハエ囀蛹殻が付着していた。

地下式横穴墓は土中に密閉されるため有機物の遺存状況が極めて良好で、ハエ囀蛹殻の確認例も多い。今回の例はその一部だが、次のような傾向がうかがえる。それは、玄室へ遺骸を埋葬した後に遺体に生息していたウジから蛹化したハエ囀蛹殻の確実な例がないことである。ST29でその可能性を認めるが、ST20の5号人骨から最も遠い位置にある鉄鏃群に囀蛹殻が残されており、より手前にある刀などには見られないのは、玄室におかれた遺体からウジがはい出て蛹化したと説明しがたい。蛹化にあたってはより近場が真っ先に占有されるはずであり、そこになくてより遠い位置に残ることはありえないだろう。つまり、埋葬後に作られた囀蛹殻はないと判断できる。ST31もそうである。ST29やST34では人骨と囀蛹殻が離れており、埋葬状態にある遺骸からのウジであるのか証明できない。

#### 4. 埋葬過程とハエ囀蛹殻

棺内から出土した遺物にハエ囀蛹殻が付着するのは、ハエが大量に発生する源である人の遺体の存在があり、遺体とハエの間に存在する時間的あるいは空間的な位置関係が重要である。人が亡くなって土中に埋葬されるまでの間はどこかに亡骸を安置しなければならず、気候条件によって腐敗する過程が促進されたりあるいは遅延したりするだろう。現代社会でも人が亡くなった日の仮通夜、翌日の通夜、翌々日の葬儀を経て遺体の火化完了まで少なくとも3日程度を要するので、古墳時代の社会にあっては、首長のみならず一般庶民にあっても、それなりの日数を要したであろう。有名な『魏志倭人伝』においては、「其死有棺無槨 封土作冢 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就歌舞飲食 已葬 举家詣水中澡浴 以如練沐」と、人の死から埋葬までの風俗記述がある。服喪としての「始死停喪十余日」を一般的には「モガリ」といい、「殯」という文字をあてる。

和田 萃氏による「殯」の研究は非常に重要である<sup>(14)</sup>。私たちが用いる「殯」という字義には、魏志倭人伝に記された弥生時代以来の「モガリ」と中国から王権に取り入れて倭独自の様式に変えていった殯宮儀礼の二つが含まれる。古墳研究において「モガリ」を考察する場合、両者を同じ視点あるいは混同しているのが現状であろう。モガリを文献から情報を得るときに、紀記記載の事項を全て網羅する研究も少なくないが<sup>(15)</sup>、これは方法論的に意味のあることであろうか。つまり後者は和田氏が明らかにしたように、後嗣継承の意味合いとしての喪がある。地域の首長や有力な共同体構成員に後嗣を選ぶような殯宮儀礼的要素が全くないとは言えないが、両者を同じ土俵に乗せて論述することは妥当ではないと考える。

ハエの活動は一般的に4月頃から11月頃とされている。遺体へのハエの集合は、ニクバエ、クロバエ、ギンバエ、イエバエが時間差をもって集まってくるが、その状況は死体の腐敗進行により異なる。暑い夏季においては早く腐敗が進みハエの集まりも早くおびただしいだろうが、初春・晩秋のような冷涼な気候では大量のハエが夏ほどたかることは少なく、寒い冬季ではハエの活動は見られない。死者の社会的階層や経済的な格差により水銀朱を手に入れるなど腐敗を抑える効果が期待された物質を用いることがある。最もハエの集りやすい頭部や上半身を中心に水銀朱を塗布する事例が多く認められ、これによりウジの発生を遅らせることができたのであろう。ともかく、人の死によりハエの発生はほぼ不可避であり、埋葬時にハエ・ウジへの対策が必要となる。考古学的に確認されたハエ囀蛹殻

は、地域の大首長というよりも地域の中の有力者あるいは有力家族といった人々の墓の検出例が多く、古墳時代に一般的行われていた「モガリ」の姿を教えてくれる。

さて、古墳への埋葬過程をきわめて単純化すれば以下ようになる。ただし、粘土槨のような堅穴系埋葬施設と横穴式石室の様な横穴系埋葬施設とは、埋葬への思想が異なり、埋葬手順も大きく異なるが、ハエ囲蛹殻がどのような状況で付着する可能性があるのかを考えるために、あえて単純化した。

フェイズ1：人の死・・・a モガリの準備、b 埋葬場所の準備（寿墓や追葬もある）

フェイズ2：安 置・・・a 仮設の場所と常設の場所、b 埋葬場所、c 棺の有無

d 物品のお供え（最終的に副葬品）、e 頭部・上半身への水銀朱塗布、  
f 埋葬準備

フェイズ3：埋 葬・・・a 入棺の機会、b 先行棺への対処、c 副葬品の配置、d 各種儀礼、  
e 埋戻し・閉塞

埋葬にかかる各種儀礼は、このような局面を集団の階層的な立場や社会的な位置によってされながら進めて行なわれた。さらに埋葬される施設の状況（たとえば石棺であるとか、木棺が現地組み立てなのかそうでないかなど）により、様々に手順や方法が変わっていくと思われる。古墳から出土する器物にハエ囲蛹殻が残されるためには、ハエが活動する時期に一致していることが大前提であり、モガリが開放的な場であることなどが田中良之氏によって整理されている<sup>(16)</sup>。そして金属錆化によってこれら有機物が保存されるのであり、それ以外であれば分解されて残らない。ハエ囲蛹殻が付着する条件を人との位置関係において確認する。

フェイズ1では、死亡当日にあっては死者を適当な場所に安置したことであろう。それがフェイズ2と同じ場所かもしれないし、あるいは居住地の住居内かもしれない。

フェイズ2は、特定場所に埋めるという埋葬までの期間でありいわゆるモガリの局面である。aとbは安置する施設である。モガリのため建物が常に集落の中にあるのか、それとも適宜その場で設営されるのか。あるいはまた、急ぎ土坑を掘って墓穴を用意している場合があるかもしれない。cでは遺体が棺に入った状態なのかそうでないのか、葉佐池古墳1号石室B棺のように底板のみの棺も少なくないだろう。dは遺体とお供えとして物品（副葬品となる）との位置関係である。遺体が棺に入っていたならばお供えの物品は棺の中かどうか。さらにeの遺体の腐敗を抑えるための水銀朱の塗布はこの段階だろう。

死後数日以内にニクバエやクロバエ、イエバエが餌を求め卵などを産み付けに集まるので、ウジが湧いているのをモガリ参加者は目の当たりにすることになる。ハエは卵や幼虫から囲蛹殻を経て成虫となるのに10日前後かかるといわれており、フェイズ2が魏志倭人伝にあるように10日程度を要するのであれば、その後半にハエの幼虫は蛹になるために餌の場である遺体から離れ近場にある乾燥した場所で囲蛹殻となる。もちろんハエの産卵はずっと継続しているので、遺体にはウジが湧き立ち、その周囲に多くの囲蛹殻が付着している状況が推測される。このように、近くにある物品にウジが付着して囲蛹殻となるのであろう。

この場が仮設の場所であれば、いわゆる喪屋とした簡便な建物になるだろう。そしてこの建物が埋葬場所であれば、堅穴系埋葬施設の墓坑あるいは棺の周囲に柱穴痕跡として確認できるはずである。この場合、モガリから埋葬の儀式は連続して行われ、遺体を移動することなく棺の蓋をして埋め戻す。喪屋が横穴系埋葬施設に立つことは想定しがたく、石室入り口などの墳丘に接するような場が論理上



可能である。古墳における建物遺構の確認はまれであり、したがって、フェイズ2の場合は古墳とは異なる場所が多かったと考えられる。

フェイズ3に移行するfの準備もおそらくこの場で行われたと思われる。持ち運べる棺であればこの段階に遺体を棺に入れることができ、現場で組み立てる棺であれば、入棺直前の姿にまで整えたことであろう。そこでは器物や遺体などに付着しているウジやハエ囲蛹殻など汚く穢れたものを清浄にする作業があったのではないかと想像する。黒瀬御坊山 A2号墳に付着していたハエ囲蛹殻の大部分は、おそらくこの作業により排除されたのではないかと考える。

フェイズ3は埋葬であり、主に儀式である。aは被葬者が棺に入ったまま古墳に来て納められるのか、それとも現場で棺が組み立てられそれに納められるのかである。bの横穴系埋葬施設であれば先行して葬られた棺が副葬品とともに整理されて埋葬場所が確保される。c・dでは棺安置後に副葬品が献じられ儀式が執行されていく。フェイズ2で遺体や副葬の物品についての囲蛹殻を整理するが、すべて除去することは不可能だろう。ウジがわいた状態となった被葬者の遺体がどのような姿になっていたのだろうか。想像するしかないが、膨張して崩れる肉を抑え人としての形を保つ方策がとられたことだろう。このような状況では遺体にウジがいる状態で埋葬されることになる。そして棺は土中で密閉されるため、ウジから蛹、成虫になったとしても生きながらえることは難しく、真っ暗闇の中で幼虫段階から蛹化することは無理だろう。つまり、埋葬された後でのウジの蛹化は想定しがたく、前項における島内地下式横穴墓で埋葬後のウジの蛹化はないという推定と整合する。

以上の考察より、鉄製品を中心に付着しているハエ囲蛹殻は、埋葬前に付着したものであり、モガリから埋葬に至る局面で、埋葬のための清浄化過程を経て施設におさめられたのである。

## まとめ

加賀市黒瀬御坊山 A2号墳出土剣にハエ囲蛹殻が付着していることを確認し、その意味を考察した。この事例は、北陸で2例目、本県では初例となる。新潟県姥ヶ入南遺跡出土鉄斧に付着したハエ囲蛹殻が国内最古の事例となろう。魏志倭人伝にはモガリが行われている様子が記述されているので、姥ヶ入南遺跡例はそれを具体的に証明するものである。ハエ囲蛹殻の確認例は、古墳時代中期以降のものが多く、特に後期にいたって多いようだが、古墳時代を通して確認できる意義は大きい。

ハエ囲蛹殻が鉄器を中心に付着して残っているのは、鉄の錆化によるものであるが、埋葬の時期がハエの活動時期と一致することと、ハエが活動できるような明るく開放的な場所にあったことの二つの要因が重なっていることが重要である。さらに本考察においてその条件を付け加えたい。それは、ハエ囲蛹殻が付着するのは、モガリの段階であり、埋葬後の段階ではない、ということである。

そしてハエ囲蛹殻を子細に観察しそれが付着する状況を復元すれば、①埋葬される時には、遺体とともにモガリで献じられた器物が清められることが基本であり、②ハエ囲蛹殻が付着した器物としないものの両者が副葬品で混在する場合、器物の置かれた位置や、器物を献じた主体者が異なる可能性も考えねばならない。

筆者はハエ囲蛹殻についてこれまで考えたことはなく、むしろ知識の乏しいままこれまで古墳研究に取り組んでいた。今回の確認作業を通して、この痕跡を見過ごした事例が多いのではないかと感じたのである。モガリから埋葬に際し清浄にするのは当然だと思うが、モガリ最中においても衣服の取り換えや火をたくななどの行為により発生する煙に防虫・防腐が予想される<sup>(17)</sup>。しかも一連の儀礼は100m 超の大型前方後円墳を築く首長層から10m 前後の古墳を築いた共同体構成員や有力構成員までの階層的な格差があり、同じモガリ儀礼を想定出来ようか。さらに地域的な特質も考えられ、古墳と

としての埋葬儀礼を一つの定式化したものとしてとらえることに不安を感じるのは、私だけだろうか。

最後に、姥ヶ入南遺跡出土剣と鉄斧の資料調査では長岡市立科学博物館の丸山一昭氏にご配慮いただいた。また出雲弥生の森博物館の坂本豊治氏にもご教示いただいた。感謝いたします。

## 註

- 1 古代歴史文化協議会とは、埼玉県、石川県、福井県、三重県、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、福岡県、佐賀県、宮崎県の14県で構成され、古墳時代を中心としたテーマにより調査研究を進めている。協議会のホームページでは、「個々の地域的な研究だけでは見えにくかった日本の大きな古代史の流れを解明するため、古代歴史文化にゆかりの深い14県で連携し、平成26年度から共同調査研究を進めています。第1期（平成26年度～平成30年度）は『古墳時代の玉類』をテーマとし、その研究成果を展覧会や成果図書で公開しました。第2期（令和元年度～令和4年度）は『古墳時代の刀剣類』をテーマとし、共同調査研究をおこなっています。」と事業の目的と活動内容を掲載している。（<https://kodairekibunkyo.jp/>）
- 2 浜崎悟司ほか2002「加賀市吸坂・黒瀬古墳群」石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
- 3 栗田茂敏ほか2003「葉佐池古墳」松山市教育委員会
- 4 報告書では、1・2号墳とも墳丘規模が明示されず、筆者の理解により墳丘規模を出した。また、1号墳は円墳と報告しているが、尾根筋の周溝を直線的に切って墳丘裾も直線であることから方墳と判断した。
- 5 田中良之2003「人骨及び付着ハエ囲蛹殻から見た殯について」『葉佐池古墳』松山市教育委員会。「肉眼的にも5mmに満たない小型のものと5～7mm程度の大きなものの大小2種類あり、（中略）囲蛹殻によるハエの同定を、九州大学大学院比較社会文化研究院生物多様性講座蔦洪教授に依頼した。その結果、大小2種類あると思われるうち、大きめのはニクバエ属であり、小さ目で長軸に直交して条線を有するのがヒメクロバエ属である（後略）」により、ハエ囲蛹殻のサイズにかかる記述を参考にした。
- 6 坂本豊治2020「開館10周年記念特別展『出雲・上塩治築山古墳とその時代』」『出雲弥生の森博物館だより』第39号 出雲弥生の森博物館
- 7 註3と同じ
- 8 渡邊裕之ほか2010「立野大谷製鉄遺跡、姥ヶ入製鉄遺跡、姥ヶ入南遺跡」新潟県教育委員会、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 9 藏富士寛2012「那珂62」福岡市教育委員会
- 10 註6に同じ
- 11 宍道年弘1985「結11号墳出土の蛇行状鉄剣」『八雲立つ風土記の丘』No.73 島根県立八雲立つ風土記の丘
- 12 中野和浩ほか2001「島内地下式横穴墓群」えびの市教育委員会ほか
- 13 中野和浩ほか2017「島内地下式横穴墓群Ⅴ、灰塚地下式横穴墓群」えびの市教育委員会ほか
- 14 和田 萃1973「殯の基礎的考察」『論集 終末期古墳』塙書房（初出：1969「殯の基礎的考察」『史林』第52巻第5号 京都大学史学研究会）
- 15 田中良之2017「殯再考」『骨から見た古代日本の親族・儀礼・社会』すいれん舎（初出：2004「殯再考」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会
- 16 註5に同じ
- 17 註15に同じ